

文学・芸術

ノンフィクション

平田栄一郎 著
▶ 在と不在のパラドックス
日欧の現代演劇論
5・10刊 四六判400頁 本体3000円
三元社



「パラドックス」に耐える胆力

ドイツの演劇美学を土台としつつ、日欧の舞台の具体的な「上演分析」とも結びつく、刺激的かつ本格的な現代演劇論

寺尾 格

演出家のピーター・ブルックが『なにもない空間』(晶文社、1971年)で直感的に把握した現代演劇の発想を、豊富な演劇実践を通して概念化したのは、ハンス・テイリス・レーマンの『ポストドラマ演劇』(同学社、2002年)であった。そのキーワードは、さらにエリカ・フィッシャー・リヒテの『パフォーマンズの美学』(論創社、2009年)によって、俳優の身体性の「現前」を軸にした観客の知覚の問題として理論化された。本書の著者平田氏は、レーマンとリヒテのそれぞれの著書の日本語訳の作業に携わり、また自身でも『ドラマトゥルク』(三元社、2010年)の執筆によって、ドイツおよび日本の演劇の現場の事情にも深い理解を示し

論の幾つもの論稿を比較し、それぞれの不十分さを明らかにする。理論的な自記りは徹底的であり、以下のような著者の主張を導き出す。すなわち俳優の身体性「現前」ある(在)が強調されるプレレンスの舞台では、逆に観客の知覚が「不安定さ・無(不在)」「ことへの意識が喚起され、また「何も無い(不在)」アプレンス舞台では、逆に「ある(在)」ことへの観客の意識が、逆説的に強調される。従って、「在と不在のパラドックス(両義性)」に対する「気づき(省察)」こそが、演劇「上演」に固有の「揺らぎ(逡巡)」のダイナミズムを生み出す「美的原理」となる。第二章以下では、理論的な論及を補強するための具体例としての舞台が取り上げられる。まずク・ナウカの『王女メディア』が、「雄弁(在)」「沈黙(不在)」の「両義性」のモデルケースとされる。さらに日本のストアハウスカンパニーの『フィジカル・シアター』、ドイツのカストルフ演出『終着駅アメリカ』、ベルギーのニード・カンパニー『ディア・ハウス』、スイスのマルチアール演出『ムルクス』『三人姉妹』と続き、最後に東日本大震災に触発された「マレビトの会」による「カタストロフィー演劇」というラインナップである。プレレンス編の三つの章のテーマは、「出現の不確実」「過剰と鬱」、「死者と生者の哀悼劇」と、各章での「在」と「不在」の絡み合いが多面的に扱われると共に、論点が次第に折り重なって、理論的な深みに向かって進むので、よってきたドラマを読んでいくような知的興奮をおぼえる。著者の立場は、一方的な理解を否定しつつも、アプレンス論の射程を広くとらえているので、評者には前半のプレレンス編以上に、後半の方に強い興味をそそられた。つまり「何も無い」「何も起こらない」非常にラディカルな舞台の積極的な分析と理論構築である。まず「踊らない身体」次に「不在と遅滞」、そして最後に「カタストロフィー演劇」となる。アウシュヴィッツの証言に関するジョルジョ・アカンベンの指摘を参照しながら、「証言するものは、証言されないものでしかありえない」という「パラドックス」が提示される。死者は語れないのだ。「語る」と語らない「見ると見えない」「在と不在」、そのように多様な「パラドックス」を引き受けることを通してしか、現代の「脱主体化」された時代を語る「主体」は成立しえない。このあたりが、著者の視点の勘所であると思われる。『マクベス』の「きれいはいきたない、きたないはきれい」になぞらえれば、さしずめ「あるは無い、無いはある」となるだろう。複雑な現実世界と誠実に対峙するためには、声高に叫ばれる安易な出来合いの「解決」を拒否し、自らの「無力さ」を見つめる「受動性」の積極的な意識こそ、反転のダイナミズムの可能性がある。パラドックスに耐える「胆力」を鍛える機会が、現実(在)と非現実(不在)のせめぎあう演劇という「美的経験」の場ではないのか。そのような熱い主張が、精緻な理論的探究の向こう側から響いてくる。装丁もなかなか凝っている。表紙の上方には福島の海を見つめる女性の後ろ姿、それを囲む書名と震災の跡らしき写真が中央、そして下方には「何も無い」青空と白い雲。本書の内容と対応しつつ、しかも様々な連想も喚起されて思わず見入ってしまった。(専修大学経済学部教員/ドイツ文学・ドイツ演劇)